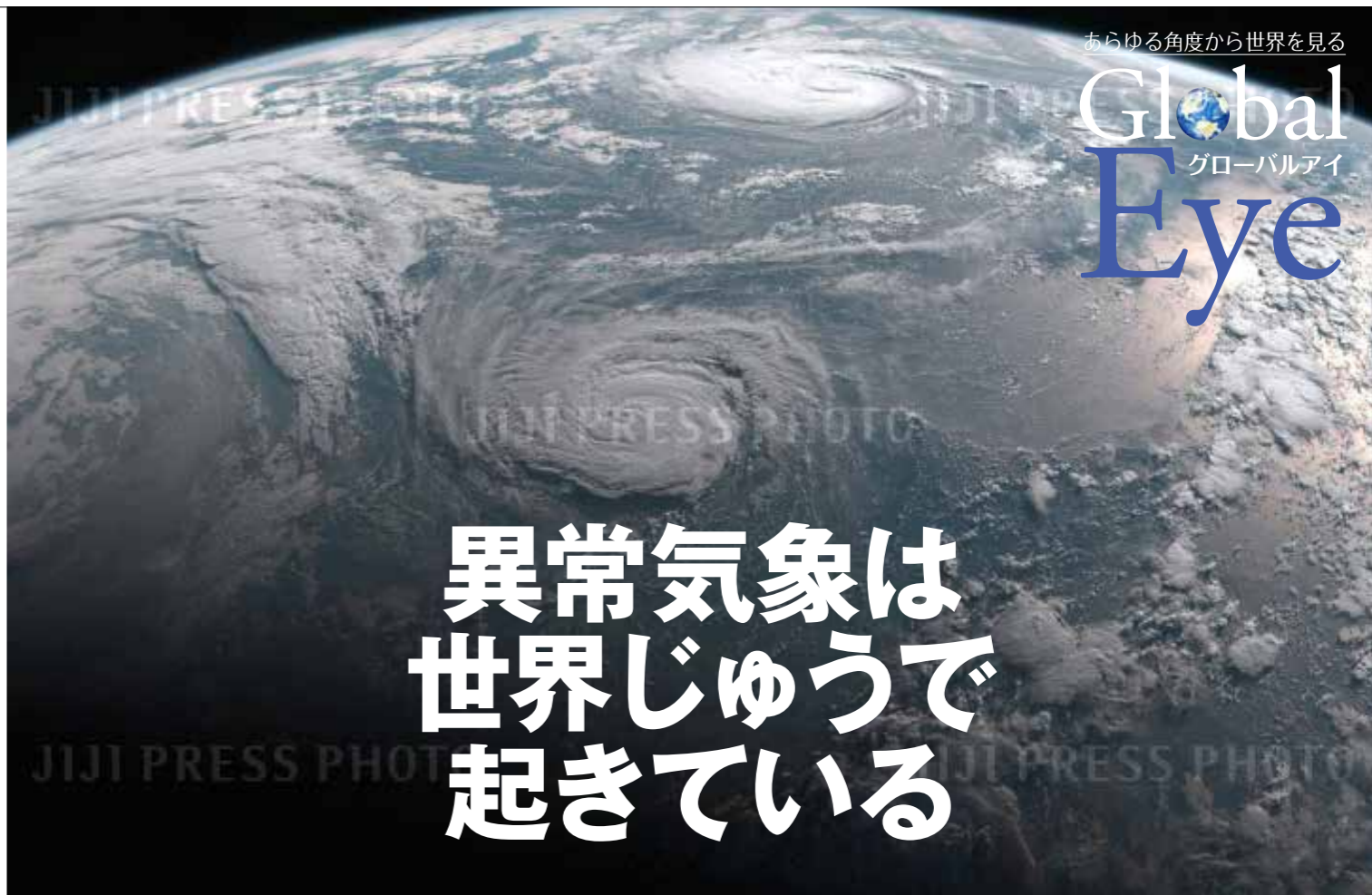


Global Eye

グローバルアイ



異常気象は世界じゅうで起きている

「ここ最近」「雪不足」が深刻な国

気象庁によると、昨年の冬は、一月上旬まで全国的な暖冬。しかし、一月後半からは、九州で記録的な大雪が観測されるなど、不安定な天気が続きました。一方で世界の国々も、不安定な気象に悩まされました。日本で「雪害」というと、交通機関の乱れや農業被害を想起しますが、「雪がない」ことで困った国もありました。



スイスの高級スキーリゾート地レザンもこんな有りに

スイスは、冠雪した美しいアルプスの山々に、世界じゅうから観光客が集まる白銀のスキーリゾート地……というイメージの国です。例年では、九月末〜十月初めには山間部で初雪が平地でも十一月頃には雪が舞います。スイス人は厳しい冬の寒さや雪と共存する術を熟知していて、夏が終わる頃から非常食や氷雪剤(塩)の準備など、雪に備え始めます。

スイス人は、注意深く備えるのと同時に、雪を楽しむにもしています。夏が終わる頃から、今年はこの山で雪遊びをしようかと休暇の計画を立て始め、雪が降れば待つてましたとばかりに、各地のスキー場に出かけます。

ところが、近年は冬の気温上昇によって、雪不足に悩まされるようになりまし。とくに国土の約六割を占めるアルプス地方は、他の地域に比べて気温上昇の影響を大きく受けています。昨年は、記録的な暖冬に見舞われ、各地のスキー場には雪がわずかしこ積もらず、



香港でもっとも標高の高い大帽山では0℃以下が観測された

に位置する香港にも、大寒波が襲来しました。

香港は、もっとも寒い一月の平均気温が一六度という亜熱帯気候です。一般家庭のエアコンは冷房使用のみで、寒さとは無縁の生活を送っています。

その日は、まず標高九五八メートルの大帽山に、霜が降りたとのニュースが流れました。多くの香港市民が、珍しい霜を一目見ようと車で山へ押しかけ、路面凍結のために、そのまま降りられなくなりました。低体温症や転倒による負傷で



マレーシア・クリム市内の住宅地でおこなわれた殺虫剤の噴霧

暑さで感染症が大流行

気候の変化は、病気にも影響します。マレーシアは通年の平均気温が三〇度前後の熱帯の国。ここ数年は Dengue 熱が流行しています。

日本での Dengue 熱は、二〇一四年に東京都を中心に約六十年ぶりの感染者が出た、大騒ぎになりました。マレーシアでは、「Dengue 熱? かかったことがあ

るよ」という人も多くいて、珍しくない病気です。しかし、一五年は十二万人超の患者が発生。前年より一割以上も感染者が多い記録的な流行で、死者も三百三十六人と、統計上最多となったのです。

その原因として、過去二十一年で最長のエルニーニョ現象(海面水温が異常に高くなる現象)が指摘されています。エルニーニョが発生した一九九七〜九八年にも、Dengue 熱が猛威を振るっているからです。

病原のウイルスを媒介する蚊は、わずかな水たまりでも繁殖します。政府は、住宅地で殺虫剤を噴霧するほか、住民の啓発にも乗り出して、Dengue 熱の最新情報と流行地点を確認できる、携帯電話用のアプリケーション「iDengue」が公開されました。

日々の暮らしだけでなく、経済や衛生状態にも影響を及ぼす「気象」。世界の気象状況と、各国の対策に目を向けることも、今後の異常気象に備えるヒントになるかもしれません。

寒すぎて休校になる 亜熱帯地域

昨年一月二十四日は、沖縄本島で初の降雪が観測された日。同日、さらに南

草や岩場がむき出しのまま。そこで各スキー場では人工雪をまいたり、スキーのリフト券を値引きしたりと、苦肉の策を講じました。打撃を受けたのは観光業だけではなく、ウィンタースポーツ関連商品や積雪対策の商品を取り扱う企業も、思いがけない雪不足に頭を痛めたのです。

スイスでは今後も温暖化が続くと見られていて、標高の高い山々のグレンドでも積雪量が半減し、景色も一変するといわれています。スイスにとって観光は、経済を支える重要な産業の一つ。雪に頼らずに海外からも観光客を呼び込むため、新たな観光の目玉を開発していくことが、今後の課題になりそうです。